

マスメディアにおける 文体の新しさ

1 文法・文体の変化

東弘子

——注目度を高める「現場性の導入」という手法——

はつぐん

ある古書店が「古本買います」「高価買入」ではなく「本をお売り下さい」と看板を掲げたことで急成長した、というエピソードは有名である。「不特定多数の人から本を買う」という業者側の行為としての情報を提供するのではなく、看板を見る通行人の行為として「本を売る」を前面に表現することで、古書店の「買取希望」というメッセージが格段に強化されたと考えられる。

われわれはマスメディアの情報の受容者となるとき、「不特定多数の聞き手（受信者）の一人」という存在である。しかし、マスメディアの言語表現が、共感的な

視点の導入や直接的呼びかけなど、さまざまな手法により積極的に「個別の聞き手」としてわれわれに働きかけてくることで、その情報への注目度、いわば「食いつき」度は変容するであろう。冒頭のエピソードはその一例である。

また、動画と音声によって情報提供されるテレビのようなメディアと、写真などの静止画と文字による新聞のようなメディアを比較した場合、現実のコミュニケーションシーン場面をより忠実に再現できるテレビ的なメディアのほうが、少ない労力によって情報への注目度が高まる場合が多いと考えられる。「ついテレビを見てしまう」ことは「つい新聞を読んでしまう」ことより

も垣根が低いということである。

マスメディアは「（不特定）多数の受信者」を想定したコミュニケーション形態ではあるが、その言語表現が常にそうであるとは限らない。しかしながら、公共性が高いと考えられている新聞やニュース番組などでは、より客観的な情報提供をめざして、個別具体的な受信者に向けての発信ではなく、不特定多数の受信者へ向けた一定の言語表現スタイルを既に獲得していると言える。しかしそのことが、聞き手・読み手といった受信者に対して、情報への注目しやすさを低めているかもしれない。受信者個人がその情報に対してどう絡むのか、もしくは、どのような具体的な発信者が主張していることかななどを明示することは「注目度」「食いつき度」を高める一つの大きな要因となるであろう。

本稿では、ある一定の文脈において標準的となっている文体を逸脱する言語表現を持ち込むことで、注目度を高める効果が発揮されていると考えられる、三つの事例を紹介してみようと思う。

一つは新聞文体の中での対話文体の積極的導入の例、次に、新聞における発言の直接引用でとくに特定の発話者を想起させる表現の例、最後はラジオ番組の中の

語りがあたかも私的空間における一対一のコミュニケーションシーン場面を想起させる例である。これらに共通するのは臨場感あふれる「現場性の導入」である。既に固定化した表現スタイルの中に、別のコミュニケーションシーンの場面のスタイルを取り込むことで、新しい表現効果が生じることを示したい。

そこに対話があるように

朝日新聞コラム「ニュースがわからん！」

朝日新聞に「ニュースがわからん！」というコラム（毎週火・土曜掲載）がある（二〇〇六年四月開始・現在二〇〇九年一〇月）継続中。ニュースに取りあげられるさまざまな時事トピックについて、フクロウのキャラクターが質問をし、記者がわかりやすく回答するといった形式となっている。

二〇〇六年一二月までの記事を抜粋して書籍用に改訂した「ニュースがわからん！」——難しいニュースが基礎からわかる」（朝日新聞二〇〇七）の「はじめに」によれば、

朝日新聞朝刊でよりニュースがわかる紙面を目指して、2006年4月から始めたのが「ニュー

表

	2006年度	2007年度	2008年度以降
本文対話	◎	◎	◎
質問タイトル	○	○～◎	◎
回答見出し	-	△	○

◎：話し言葉文体+役割語
○：話し言葉文体
△：書き言葉文体（見出し文体）

以上の変化をまとめると、表のようになり、段階的に話し言葉と役割語による「対話の再現」の度合いが高くなってきている様子がわかる。

このコラムでは、わかりやすくするためにできるだけ易しい語彙を選択し、同時に、このように、わかりやすい表現形式の方法として「文体」という面での工夫がなされてきていると言えよう。

こうした対話形式の表示自体は特に目新しいことではなく、情報誌のQ&Aや商品のマニュアル、広告などでもす

そこに発言者がいるように
特徴的な発言スタイルを持つ政治家の発言の引用

「自民党もなめとるよ。(景気回復後の)増税なんて、とんでもないやあ」

(朝日新聞、朝刊【社会面】二〇〇九・八・九)(資料①)
「わしよりいい男だが、えりやあ似とる」

1 文法・文体の変化

スがわからん！」です。(中略)専門用語を使わず、だれにでも「ホホウ」とうなずいてもらえることを目指しました。

とあり、ニュースを読み解くための基礎知識をわかりやすく紹介する意図があることが見て取れる。

このコラムの標題が記者側の立場からの表現「難しいニュースの用語」や「ニュース解説」ではなく、また読者の側の視点からの「ニュースがわからない」だけでなく「ニュースがわからん！」となっているのは、読者の日常語による不服の表現の再現とも言える。

三年以上連載しているコラムであるが、そのフォームは二〇〇七年度と二〇〇八年度の四月に改訂されており、改訂毎に「リアルな対話形式」をより前面に出してきている(二回の改訂毎に紙面レイアウトおよび記事の文字数の若干の変更も伴う)。

二〇〇六年の連載開始当初より、コラムの各回のタイトルは「ワンセグで何ができるの?」「新興市場ってなあに?」のように話し言葉文体の質問形式(横書き)をとっている。対話形式のコラム本文では、三匹のフクロウのキャラクター(ホー先生・老人、アウルさん・女性、コブク郎・子ども)に合わせ「〜とは何じゃ?」「〜どうなったのかしら?」「〜どういう意味なの?」な

どいゆるる役割語(注1)的表現を多用し、また縮約形、終助詞なども用いて話し言葉的な要素を盛り込んでいる(注2)。あたかもそこでフクロウと記者の対話があり、読者はフクロウに共感しつつそこで取り交わされる対話を、見聞きするようなイメージである。しかし、質問タイトルには役割語は使用されていない(たとえば質問(ホー先生)「WTO交渉、何をもめているの?」(二〇〇六・六・二二)、質問(コブク郎)「芥川賞・直木賞、なぜ脚光?」(二〇〇六・七・一五など)。

二〇〇七年度になると、質問タイトルにも徐々に役割語が加えられるようになり、また、質問の回答をまとめた縦書きの見出しが付されるようになる(たとえば、質問(アウル)「はしがが若者に大流行したわね」、回答「予防率上げて「排除」狙う」(二〇〇七・八・二八)、質問(ホー先生)「政府系投資ファンドって何じゃ?」、回答「原油収入など元手 国が長期運用」(二〇〇八・三・六)など)。読者は一目で、質問と回答のポイントを知ることとなる。この段階で、回答の見出しは、コンパクトにまとめた通常の見出しにありがちな文体で名詞止めなどが目立つ。

二〇〇八年度からは質問タイトルの役割語の使用が増加し、さらに回答の文体も書き言葉的な見出し文体から「〜だよ」「〜するのさ」「〜だね」など話し言葉

的な要素が多用されるようになる(たとえば、質問(ホー先生)「年金が天引きで減額されておるが?」、回答「新医療制度による、高齢者の保険料負担だよ」(二〇〇八・四・一五)、質問(コブク郎)「珍しいしこ名のお相撲さんがいるね」、回答「命名規定はなくて、本名を使う力士もいるよ」(二〇〇九・七・一六)など)。

で積極的に採り入れられている。ただし、新聞というメディアは、報道などの情報を伝達する際、通常、より客観的な記述をめざすため、不特定多数の読者に対して筆者の個別的立場に拠った情報の提示の仕方は避ける「無私の文体」(注3)を基本的な文体として採用している。また、社会的上位者に対しても基本的には敬語を使用しない(注4)ことも、このような話し手と聞き手の個性を特定する言語表現が避けられることとあらわれでもある。こうした中でそのルールをあえて逸脱し、そこに対話を再現したかのような「現場性の導入」の手法はとりわけ目を引くと言えよう(注5)。

コラムの連載は、見出しそのものを対話形式で完結させ、多分に対話的言語要素を前面に出しつつ現在も継続中である。

1 文法・文体の変化

(中日新聞、二〇〇九・一〇・二二、中日新聞 CHUNICHI Web (資料②))

これは、新聞記事内の、ある政治家の発言の引用部分だが、発言の主はおわかりになったであろうか？河村たかし名古屋市長である。旗を立てた自転車での選挙運動とともに彼の「名古屋弁」は、トレードマークを越え、既にスタイル化している。市長になりたての頃、地元メディアでは、河村氏のことばについて「親しみやすい」といったプラスの意見のみならず「汚い」「品がない」「本物の名古屋弁ではない」「恥ずかしい」などさまざまな批判的な市民の意見が真剣に飛び交ったほどで、河村市長＝名古屋弁のイメージは完全に定着している。右の朝日新聞の例は、宝塚市長選挙の応援演説の場における記事であり、衆議院議員時代にテレビ放送で全国にむけて名古屋弁イメージを広げた成果であろうか、全国紙でも「名古屋弁スタイル」での引用がなされている。

そもそも発言を直接引用の形式で記事に引用するとしても、音声もコンテキストも存在しない新聞紙面上で、表現をまったく変更しないということはあり得ない。かえってわかりにくく冗長になってしまふからである。たとえば、羽田空港の国際ハブ構想に対する

森田健作千葉県知事の音声の発言が「ホントね、こんな理不尽なことがね、続くならば、千葉県怒りますよ。冗談じゃないって、そういう気持ちですよ。わたしは。(中略)一つずつ一つずつ積み重ねてきて、ここまで来たんですよ。それが、あの大臣の一言でパーですよ。」(You Tube (資料③))とあったのに対して、朝日新聞ではその部分に相当する発言として、次のようにまとめなおして引用している。

「皆さんと話し合って積み重ねてきたが、大臣の一言でパー。こんな理不尽なことが続くなら千葉県怒りますよ」

(朝日新聞、朝刊【社会】二〇〇九・一〇・二五) (資料①)

公的な場での発言を常に(おそらく意識的に)名古屋方言でおこなっている河村氏ではあるが、このような変更と同様に、

「地方負担が出ないように」

(朝日新聞、朝刊【社会】二〇〇九・一〇・二七)

などと、方言の部分こそざ落とされた直接引用をされることもある。

しかしながら、河村氏の発言の引用に、名古屋方言とわかる表現が採用されるケースが多いのは、彼の言語スタイルの認知度の高さから、それを利用すること

事のようにというふうにあなたおっしゃったけどね、わたくしは自分自身を客観的に見ることができるとです！」とおっしゃっていた。

「対一」ミニユニケーションのよつに —NHK FM放送「名曲のたのしみ」吉田秀和—

「名曲のたのしみ」吉田秀和

一九七一年から継続しているクラシック音楽の番組である。時報の直後に、番組の開始を知らせるテーマ曲もなく、いつも右のタイトルコールで始まる語り

は、ラジオのリスナーのうちの一人である「私」が、あたかも吉田氏のそばにいる錯覚を生じさせる。それは、吉田氏の語りがクラシック音楽について曲の前後に一人で解説する形式であるにもかかわらず、原稿を読み、ラジオの受信者全体に伝えるというより、ラジオというメディアを通していながら、特定の誰かとの個人的な談話をするようなスタイルであることによる。もちろんその特定の相手の声は現れない。

具体的には以下の引用のように、形の整っていない接続表現、縮約形、終助詞の多用、語彙の選択、文の係り受けや接続詞の論理関係が成立していない、いい

が「現場性の導入」となり、テレビニュースで河村氏の動画が映し出されたかのような効果が生まれるからだと考えられる。もし、民主党議員候補者達の多くが自転車に乗ったように、多くの議員が名古屋弁を使用し始めたら、河村氏は、今ほど方言要素を多分に含んだ直接引用をしてもらえなくなるだろう。「河村節」として差別化されているからこそ、直接引用での現場再現効果があるのである。

ところで、次の直接引用の発言の主はおわかりになるだろうか？

「自民党は(07年の)参院選挙の時にも『1年で解決』みたいなおっしゃり方をした。選挙が近くなると楽観的におっしゃるが、現実問題として1年2年たってもなんら進捗していない」

(朝日新聞、朝刊【政策総合】二〇〇九・八・五) (資料①)

議論の相手側発言を自分の発言の中で引用する際には、かならず「おっしゃる」とし、その他、話題に関わる関係各位について、敬語を多用し上に待遇する(遠巻きに牽制する)表現を好む、鳩山由紀夫首相の発言の引用である。果たして「鳩山スタイル」となり得るのだろうか。

ちなみに福田康夫元首相も、例の辞任会見で「他人

1 文法・文体の変化

よどみが多いなど、さまざまな点において、「解説」という分野にはあまりなじまない、日常の個人談話的な表現が見うけられる。

「名曲の楽しみ」吉田秀和。今日はハイドンのミサから聴きましょう。ハイドンはエスターハージの侯爵のところの楽団副楽長として就任してきたときには、まだ楽長が生きてましてね。グレゴール・ベルナーという人でしたけれども。そしてハイドンの方は世俗音楽を、請けます、ほれからベルナーの方は厳肅なる宗教音楽を、請けます、というふうに分担が決まっていたんですよ。ところがその楽長先生は、つまり、一七六六年に死んでしまいました。それでハイドンは世俗音楽だけじゃなくって、教会音楽、宗教音楽も書かなきゃならないハメになりました。とつても忙しかつたんですよ。それで、何曲も曲が残っていますけれども、今日はそのうちセイント・サンクトニコラウスのミサというあだ名のついているミサ第3番……第四番、オゴケン・ナルルによると、ジャンル二二一六というミサ。これから聴こうと思います。(後略)

(名曲のたのしみ—ハイドン その音楽と生涯—⑬ NHK FM、二〇〇九・一〇・一七、21:00～22:00放送分より)

という決まり文句で吉田氏の語りは終了する。その直後、アナウンサーの声で

「名曲のたのしみ。お話は吉田秀和さんでした。」

と、番組が終了し、音楽と吉田氏と過ごした私的空間から、ラジオの前の現実空間に引き戻される仕組みになっていると私には思われるのだが、いかがであろうか。

おわりに

マスメディアが、本質的に多対多のコミュニケーションのための媒体であることを考えれば、ここで紹介した「あたかもそこに具体的な人が存在するような」現場性を導入したスタイルは、言語表現によって擬似的に創出されたコミュニケーション空間である。このようなスタイル選択、スタイルシフトによって変容する表現効果とその原理について、とくに「です・ます」体の機能については、「共在性」という概念を用いて別項にて詳細に論じている。宮地朝子ほか(二〇〇七)、北村雅則ほか(二〇〇六)、東弘子ほか(二〇〇六)をご覧ください。

注 1 金水敏(二〇〇三)参照。

り冒頭の解説部分)

放送用原稿はあるようだが、それにとらわれない自由な語り口である(注6)。

先に新聞というメディアでの「無私の文体」ということについて述べたが、ラジオ放送の音楽番組では、新聞の書き言葉のように客観的事実を述べるようなスタイルをとるわけではない。リスナーへの語りかけの言葉や挨拶も多用されるが、クラシック音楽のイメージどおりもつと「きちんとした」解説の文章で構成されている。また、聞き手と解説者などによる対談形式も多く、その場合、(多数のラジオリスナーがいることを意識してはいるだろうが)それぞれが対談、対話の相手への語りかけをする、といったスタイルとなっている。

ポップスなどを扱ってもっとカジュアルな音楽番組であっても、リスナー全般を「仲間」ととらえたような語りや、はがきやメールで寄せられたリスナーへの個人的な呼びかけということは多くあり得るのだが、吉田氏のスタイルはそれらとも全く異なる。三七年間の放送の中でいつ頃このスタイルが確立されたのか(注7)、「日常の個人談話的言語表現」を用いる手法は、「吉田秀和と私」の擬似的な私的空間を生み出しつつづけている。

「じゃ、また来週。さよなら」

2 こうした話し言葉的な言語要素を宮地朝子ほか(二〇〇七)では、擬似的な対話場面を想起させる言語要素として「共在マーカー」と名付けた。

3 森山卓郎(二〇〇三)参照。

4 東弘子(二〇〇六)参照。

5 北村雅則ほか(二〇〇六)、宮地朝子ほか(二〇〇七)では、このように本来話し手・聞き手が個別具体的に存在していないにもかかわらず、存在しているかのような言語表現をあえて選択することで、具体的な対話場面が存在しているかのように表現されている発話場面を「疑似共在」の場と位置づけている。

6 吉田秀和・堀江敏幸(二〇〇七)の雑誌対談には「(吉田)僕のは、原則は、まず原稿を作っておいて、それを見ながらしゃべるといやり方ですが、いつも原稿通りしゃべるのではなくて、その場の思いつきで何かを付け加えたり、削ったりしていることが多い。そうやるとシヨパンの即興曲とまでは言わないけども、その即興の楽しさが聴いている人に伝わるんですね。(三六頁)」とある。

7 吉田秀和・堀江敏幸(二〇〇七)の同対談の中には、吉田氏が音楽批評の翻訳を通じて、自分自身の日本語のスタイルを獲得したこと、さらに「(吉田) 自覚的に自分のスタイルを作るとい仕事なくしては、音楽批評は成り立たない(三四頁)」とスタイルへのこだわりが見てとれる発言がある。対談相手の堀江氏も、吉田氏の放送のことばにもそれが表れていると指摘し、吉田氏は現在の放送のことばのスタイルを獲得するまでには苦勞した、とも述べている。

資料

① 朝日新聞オンライン記事データベース 開蔵HPビジュア

1 文法・文体の変化

- ル・フォーライブラリー
- ② <http://www.chunichi.co.jp/article/aichi/20091012/CK200910120200026.html?ref=related> (2009/10/17 マクセス)
- ③ <http://www.youtube.com/watch?v=A9JGYETV8d8> (2009/10/20 アクサス) You Tube 個人投稿による動画アップのため、TVニュースと思われるが、どのTV局のニュースからの引用であるか未確認である。
- ※資料②・③は掲載期間が短いため、常に確認できるとは限らない。

吉田秀和・堀江敏幸(二〇〇七)『書く』ことは『聴く』こと—吉田秀和ロングインタビュー—(『考える人』21、三〇〜四一頁、新潮社)

(あずま・ひろ) 愛知県立大学准教授

文献

- 朝日新聞社(二〇〇七)『ニュースがわからん!—難しいニュースが基礎からわかる』(リヨン社)
- 東弘子(二〇〇六)『批判的言説分析としての敬語分析—マスメディアにおける敬語・敬称の使用／非使用から—』(『社会言語学』VI『社会言語学』刊行会、六一〜七五頁)
- 東弘子ほか(二〇〇六)『書くメディア』にあらわれる「です・ます体」のわかりやすさ(『言語処理学会第12回年次大会発表論文集、二四〜二七頁』)
- 北村雅則ほか(二〇〇六)『伝達場面の構造と「です・ます」の諸機能』(『言語処理学会第12回年次大会発表論文集、一一三九〜一四二頁』)
- 金水敏(二〇〇三)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』(岩波書店)
- 宮地朝子ほか(二〇〇七)『共存性からみた「です・ます」の諸機能』(『自然言語処理』Vol.14 No.3、一七〜三八頁)
- 森山卓郎(二〇〇三)『コミュニケーション力をみがく—日本語表現の戦略—』(NHK出版)